英文レター誌「SOLA」の創刊をふりかえって

田　中　　博*

日本気象学会第34期理事会から第35期理事会への引継ぎを機会に，第33・34期SOLA担当理事として，2005年1月に創刊された英文レター誌「SOLA」の現状および創刊にまつわるエピソードを書き残し，後世に伝えたいと思い筆を執った．

SOLA編集規定（天気，51,680-681）で定義されているように，本誌の正式な名称は「SOLA」であり，これは「Scientific Online Letters on the Atmosphere」の略語である．本誌は，大気科学全般と大気科学を含むクロスオーバー領域における先端分野の研究成果を，電子媒体により広くしかも迅速に読者に伝達し，学術的な情報交換に貢献することを目的とする．そのため，電子ジャーナルとしての速報性，流通性を最重視し，英文国際誌として活用されることを目指している．投稿受付から受理の採否判定までを2ヶ月以内で行う，という2ヶ月ルールが，編集規定の特徴である．

新期理事会が発足し，新編集委員長が理事会により任命されると，編集規定により，編集委員長は運営委員の人選を行い運営部会を招集する．運営部会は広範にわたる学術分野のバランスを考慮して編集委員の人選を行う．積極的に海外編集委員を集めることが望まれる．編集委員は論文の査読・審査に責任を持ち，採否判定の権限を有する．このように，編集委員の上に運営委員を設けて，編集委員長を筆頭とする編集委員会が構成されることが特徴である．運営委員の主な任務は，SOLAの速報性と流通性を重視し，国際誌としての水準を確保することである．具体的には，2ヶ月ルールに反して長引く審査があれば，助言や催促を行い，編集委員による論文の受理報告に目を通し確認する．不採用論文に対しては不採用理由の正当性を評価して，公平公正な審査水準を保つことが任務となる．

SOLAの創刊以前の話になるが，気象集誌に投稿された論文の多くは，審査，受理，掲載までに1年以上を要することが多かった．当時の急速な電子ジャーナル化への流れの中で，気象集誌のフルペーパーとノート（Notes and Correspondence）の他に，新たに速報性を重視したレター誌の創設が話題にのぼったのは2002年の春季大会懇親会の時であった．気象集誌は当時の電子化の流れに迅速に対応し，科学技術振興機構が運営するJ-STAGE（科学技術情報発信・流通総合システム）による学術誌の電子ジャーナル化が始まると，その第1期グループとして2001年から電子ジャーナル化を開始していた．しかし，速報性を重視した英文レター誌を気象集誌の枠内で創設することについては，2ヶ月に一度の頻度で編集委員会を開催し，論文の採否を決定する編集体制からして困難であるとの判断であった．そのため，総合計画委員会の懸案事項として気象集誌とは別の新たな英文レター誌創刊への機運が熟していった．

SOLA創刊にむけた具体的な活動は，（故）木田秀次理事長が総合計画担当理事を務めていた当時の2003年5月23日に，第1回レター誌発行準備委員会が開催されたことから始まる．新たなレター誌立ち上げのために木田の呼びかけで集まったのは，田中　博，新野宏，里村雄彦，三上正男の計5名であった．当時，田中は気象集誌編集委員長，新野は天気編集委員長，里村は電子情報委員長を務めていた．学会として新たな電子ジャーナルを生み出すために，当時の学会が持つ総力が木田の提案で結集された．三上は呼びかけ人の一人であり，庶務を担当し委員会を牽引した．

レター誌「SOLA」の名称が決まったのは，2004年1月16-17日に開催された第4回準備委員会の時である．雪の舞う京都に木田の呼びかけで5名が集結し，泊りがけで将来構想を練り上げた．レター誌の名称を決めるために「天気」に公募を出し，集まった20件の提案の中に「SORA」という提案（三上）があった．

* 筑波大学計算科学研究センター．
tanaka@sakura.cc.tsukuba.ac.jp
© 2008　日本気象学会

それをヒントに木田が席上でScientific Online Letters for the Atmosphere：SOLAを提案したのが始まりである．公募案の中には残念ながら納得のゆく名称がなく，公募案を参考に一晩考えてひらめいたという名称であった．（後日，Nativeにコメントを求め，forがonになる．）

SOLAの創刊が2004年5月17日の気象学会総会で認可されると，準備は急ピッチで進められ，同年6月28日には編集委員会が組織された．夏休みの期間に英文で編集規定と投稿規程が書かれ，10月1日には投稿論文の受付が開始された．この日を待っていたかのように，数件の投稿が入った．そして，翌年 2005年正月明けの1月7日に，J-STAGEのプラットホームにSOLAの最初の論文が掲載されることになる．創刊日の夜中12時過ぎに，J-STAGEの自動システムが作動し，PCのスクリーンに最初の論文が生まれる瞬間を見て，皆で喜んだ．今後，もしかすると100年は続く学術誌の1ページ目が，目の前に登場したことの意味をかみ締め，感慨にふけった．

当初の編集システムやデザインはすべて手作りであり，創刊時の編集助手の黒崎泰典によるところが大きい．また，投稿から掲載までの膨大な論文情報フローを，手際よくこなした編集助手の本田恭子の貢献は極めて大きい．

その後，2005年9月9日には，投稿から審査，改訂，受理，そしてJ-STAGEへの掲載までのすべての工程がJ-STAGE上で行える新しい編集システムが立ち上がった．創刊時の手作りのSOLA編集システムやバナーは役目を終え，SOLAは本格運営に突入した．2004年は13編，2005年には80編の投稿があり，53編が登載された．この年にはIPCC第4次報告書のための駆け込み投稿が追い風となって，多くの投稿がなされた．また，J-STAGEのアクセス統計によるSOLAの初年度のアクセス比率は，最高ランクに位置づけられた．編集委員会は第33期から第34期へ移行し，2006年は45編，2007年は35編の論文が登載されている．最近は減少気味であるが，これは投稿されても不採用となる論文が多く，投稿の割には登載にたどり着けない論文が多いことが原因のひとつである．投稿から採否判定までを2ヶ月で行うSOLAの2ヶ月ルールの下では，改訂に時間がかかると判断される場合には，一度不採用とし，著者には再投稿するように勧めている．いずれにせよ，登載論文数を増やすことは，第35期の最大の課題であろう．気象集誌のノートは，審査に4ヶ月ルールを採用しており，SOLAの2ヶ月ルールと一部バッティングすることが懸念されている．SOLAの投稿数を維持したまま気象集誌と共存するためには，相互の仕分けを検討する必要がある．SOLAの場合，カラーの図やアニメーションなどを掲載できるメリットを生かして，気象集誌との共存を実現して欲しい．

2007年4月1日には，ISI社に対しImpact Factorの申請手続きを開始し，2008年5月に採用通知を受け取った．実際のImpact Factorの発表には，今後さらにデータの蓄積を待たねばならないが，SOLAと気象集誌の相乗効果により，双方のImpact Factorが向上することを期待している．これにより，今後SOLAが国際誌として広く認知されるようになり，投稿数が増え，大気科学分野における一流の国際誌へと躍進することを切に望んでいる．（文中敬称略）